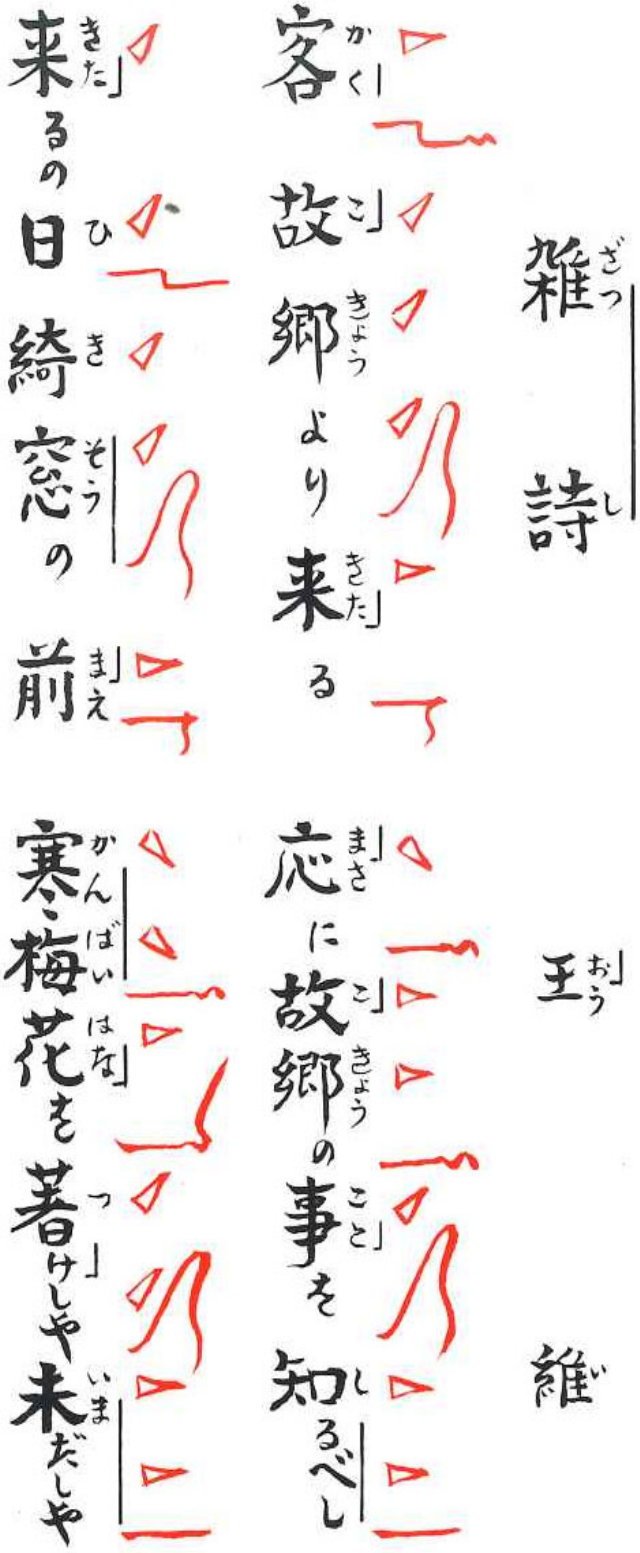

【作者】王維（七〇一？～七六一年）・盛唐の詩人。字は摩詰。太原祁県（現・山西省祁県東南）の人。進士となり、右拾遺…尚書右丞等を歴任。晩年は仏教に傾倒した。同時代の詩人李白が“詩仙”、杜甫が“詩聖”と呼ばれるのに対し、その典雅静謐な詩風から詩仏と呼ばれ、南朝より続く自然詩を大成させた。韋応物、孟浩然、柳宗元と並び、唐の時代を象徴する自然詩人である。とりわけ、王維はその中でも際だった存在である。画についても、“南画の祖”と仰がれている。

【語釈】＊雑詩…興の趣（おもむ）くままに作った、型にとらわれない詩。　＊故郷…ふるさと。ここでは、王維の妻などの家族がいる。
＊應知…きっと知っていることだろう。　來日…ここへやってくる時。　＊綺窗…美しい飾りのある窓。　＊寒梅：早咲きの梅。

【通釈】あなたは、わたしの郷里からやってきたので。きっと故郷の出来事を知っていることだろう。
ここへやってくる時には、美しい飾りのある妻の部屋の窓の前にある。早咲きの梅は、花をつけただろうか。